

第14回安威川ダム自然環境保全対策検討委員会 議事概要

(1/2)

会議名	第14回安威川ダム自然環境保全対策検討委員会
開催日時	平成24年7月17日(火)15:00~17:00
開催場所	大阪府庁本館 2階 第三委員会室
出席者	委員：池委員、江崎委員○、久留飛委員、栃本委員、長田委員、原田委員、道奥委員 計7名(欠席：養父委員) (○:委員長、敬称略、五十音順)
議事内容	1. 有効活用容量の運用について
<p><b>前回議事内容の確認</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・前回(第13回)委員会の議事概要の確認を行い、了承を得た。</li> </ul> <p><b>1. 有効活用容量の運用について</b></p> <p>(事務局)： 利水撤退に伴う不特定利水容量100万m<sup>3</sup>の有効活用策の一つとして、出水頻度の減少に伴う下流河川の自然環境への影響を軽減する方策であるフラッシュ放流について検討いただきたい。</p> <p>(委員)： 自然環境保全対策検討委員会としては、ダム規模は変更しないという河川整備委員会の結論に基づいて議論を行う。</p> <p>(委員)： 付着藻類を剥離させる流量について、三春ダム、寒河江ダムの事例で10m<sup>3</sup>/s、20m<sup>3</sup>/sという数字がでていますが、河川形状、断面等が異なるため単純に流量だけでは比較できないのではないかと。付着藻類を剥離させるだけの流速、掃流力が出るかどうかの観点からの検証が必要である。</p> <p>(事務局)： 付着藻類の剥離について、河川の流量、流速、掃流力との関係を整理し次回提示する。</p> <p>(委員)： 流況は2008年までのデータで、河床材料の調査が2010年、2011年に実施されており、データの年度が異なるため流況の変化と河床材料の変化の分析ができない。定性的にでも2010年、2011年の流況を教えて欲しい。</p> <p>(委員)： ダムを建設後の下流河川の環境をどのように維持するのかを議論するのは非常に重要である。</p> <p>(委員)： 高水敷を公園的に利用している現状では、高水敷に水が乗るようなフラッシュ放流は、安全上、選択肢としてあり得ない。</p> <p>(委員)： 現計画での選択取水設備の放水量は最大20m<sup>3</sup>/sとあるが、高水敷が冠水しない範囲で30m<sup>3</sup>/sまで流せるのであれば、30m<sup>3</sup>/sまで放水できる設備にすべき。</p> <p>(事務局)： 最大放流量については、下流域の環境改善の効果や安全性などの検討も踏まえ、検討していきたい。</p> <p>(委員)： 放流量が増えると、取水時に狙った層だけでなく、上下の層も引いてしまうので、選択取水設備であっても取水流動によって懸念される水質の問題の検討が今後必要。</p> <p>(委員)： 下流のほうがBOD等の数値が高い結果になっている。原因は何か。</p> <p>(事務局)： 上流から下流に行くに従い、人の生活や工場が多くなり汚濁負荷が高くなるため、BODは高くなる傾向にある。</p>	

(委員)： ダム建設後の水温について1℃程度の変化は生物にとって影響はほとんどないとしているが、水温上昇による生物への影響について精査した方が良い。

(委員)： フラッシュ放流によりできるだけ環境を維持することはよいことだと思うが、効果を過大に見積もらないように注意して欲しい。

アーマーコート化を防ぐために土砂を流すことを検討し、議論する必要がある。

(委員)： 不特定利水容量100万m<sup>3</sup>の活用策として、下流河川への環境面での影響を軽減するために、フラッシュ放流に使用することについては、下流河川の環境改善に資すると考えられる。今後、規模や具体的な方法については、さらに検討を進める必要がある。